



■国際学専攻修士課程研究指導者一覧

教授 阿野 幸一

専門領域 英語教育学、応用言語学

研究内容

国際社会で活躍するために必要な英語コミュニケーション能力を育成するための英語教授法を主な研究対象とする。第二言語習得研究の成果を踏まえ、日本の環境において英語を習得するための要因を、学習者と指導者の両観点から考察する。英語教育が行われている教室を主な調査対象とし、授業分析やアクションリサーチの手法などを取り入れながら、英語教育現場に還元できる研究を目標とする。研究領域は、4技能5領域の指導法、領域統合による指導、動機づけ、教材、指導と評価などである。

教授 奥田 孝晴

専門領域 アジア経済論、開発経済論

研究内容

主に開発経済学、アジア経済論の知見をもとにアジア地域の社会経済に関わる諸問題、あるいは低開発に起因する諸課題への問題発見、構造分析、解決への方法提言などを専らとする研究指導を行う。希望修士生には修士論文の主題に適する関連文献、統計資料等を適宜紹介するとともに、必要な指導助言を行う。

教授 海津ゆりえ

専門領域 エコツーリズム、サステナブル・ツーリズム、地域活性化、地域計画

研究内容

観光は地域の持続ある発展を支える経済活動となる一方で、とすると環境や地域の生活文化や社会の継承と矛盾するものとして振る舞い、環境破壊や生活文化の変容をもたらしてきた。この矛盾解決を志向し、ポストマストツーリズムとして生まれた概念がエコツーリズムを含むサステナブルツーリズムである。これら新しい観光－社会－環境の関係を研究テーマとする。フィールドワークを通じた問題の所在と課題の発見、研究仮説に応じた調査設計と分析を指導する。

教授 小島 克巳

専門領域 交通経済学、公益事業論

研究内容

航空や鉄道などの交通手段の発達が高齢者の観光地への移動を容易にし、地域の観光振興に大きく寄与してきた一方、観光輸送を担う交通事業者も観光地や観光産業の発展によってその経営を支えられてきた。そこで、観光と交通の関係に焦点を当て、交通の発達や交通インフラの整備が国・地域の観光振興に与える影響や観光振興が交通事業者の経営面に与える影響等について事例研究を行い、観光振興という面から見た現在の交通政策の評価と課題を理論的および実証的に明らかにすることを研究指導の中心とする。

教授 椎野 信雄

専門領域 市民社会論、ジェンダー論、社会学

研究内容

国際社会を背景にしたグローバルな諸問題を考察する際に「グローバル・シティズンシップ」や「ジェンダー」の視点を持つことは、現代世界では必須の要件である。しかし、この理解度は日本社会では余り高くない現状がある。この現状認識を出発点として、国際社会の諸問題に対して、「グローバル・シティズンシップ」や「ジェンダー」の視点を持った理解・分析・解決を目指し、研究テーマに沿って調査研究・事例研究・理論研究ができることを目標とする。

准教授 清水 麻帆

専門領域 地域経済学、文化経済学、地域政策論、コンテンツツーリズム論

研究内容

主に文化資源を活用した都市・地域の再生や維持可能な発展のあり方について研究する。具体的には、アニメや漫画、音楽や文学、映画などのメディアコンテンツ、絵画などのアート（芸術祭を含む）、そして、文化施設など、伝統文化からポップカルチャーまで幅広く地域の様々な文化資源を対象とし、それらを活かした地域社会や経済の活性化とそれに関連する地域政策のあり方を研究する。研究方法は、内発的発展論や創造都市論の理論的枠組みからアプローチした事例研究を主として、フィールドワークや質的・量的分析など研究課題に合わせた指導とする。

教授 菅原 周一

専門領域 ファイナンス

研究内容

金融・経済のグローバル化が進展していく過程で、世界各国が抱えることになった多くの金融・経済面の課題を整理した上で、日本の現状をファイナンスの立場から把握する。そして、金融危機後に目覚ましい回復を遂げつつあるアジア諸国を中心とした国々が今後取るべき方法論を概観するとともに、物価安定化のための金融政策、さらには需要創出・喚起やセーフティネットの整備等、今後解決すべき課題とは何かについて、研究指導を行う。

准教授 孫 美幸

専門領域 平和教育、多文化共生教育、ホリスティック教育

研究内容

多文化社会の進行に伴い、多様な文化背景をもつ人々が平和に共に生きていくにはどうすればよいのか、そのような社会における学びとはどのようなものかを考察する。国境を越えて移動する人々の文化的多様性への気づきから、すべての人がアイデンティティの複合性や流動性について考えていく過程を重視する。また、人間の全的な存在に関わろうとするホリスティックなアプローチを検討する。研究指導では、多様な文化背景をもつ人々が平和に暮らしていく、ホリスティックな学びに関わる研究テーマについて、文献資料を使った理論研究や現地でのフィールド調査を行う。理論と実践の架橋を大切に論文を執筆できるように、共に学び合いながら研究を進める。

教授 林 薫

専門領域 国際開発、開発援助、国際協力、国際関係論

研究内容

当研究室では実証的な開発研究を基本として、科学的根拠のある政策提言を目指す。第1セメスターではテーマと仮説を設定するとともに、どのようなデータが利用可能か検討する。第2セメスターでは一次データの収集の必要がある場合に、現地でのデータ収集を行う。第3、第4セメスターでは論文を完成させる。

准教授 黛 陽子

専門領域 環境学、環境意識、環境共生、地域政策、国際協力

研究内容

「地域循環共生圏」の構築の目的のもと、自然環境保全と地域経済の持続可能な発展を主軸に据え、具体的かつ包括的な構想の実現が期待されている。SDGsの実現が可能な形で、地域の多様な資源を生かし、資源循環、自然共生、第6次産業と雇用の創出等が組み合わされた、地域の自然・経済・社会問題の解決を図ることにつながる研究テーマについて、仮説の設定、現地調査、統計分析の流れで科学論文を仕上げることを念頭に指導を行なう。

教授 宮原 辰夫**専門領域** 政治学、地域研究（南アジア）**研究内容**

グローバル化は各国間のヒト、モノ、カネの移動をより活発にするだけでなく、産業のあり方にまで様々な形で影響を与えている。こうしたグローバル化の進展の中で、南アジア（インド）の地域研究を単に政治的な側面にとらわれず、日本とインドの観光産業のあり方、歴史や文化の捉え方や訪日外国人の受け入れ方などの観点から、両国の文化的側面の比較研究と位置づけて研究を進める。したがって、こうした比較文化の側面から研究テーマに沿って研究指導を行う。

教授 山田 修嗣**専門領域** 産業社会学、環境社会学（持続可能な社会構築の研究）**研究内容**

現代社会の状況を分析するにあたり、行政が社会を形成する、あるいは、企業が社会に影響を与えるという現状認識に加え、市民が社会を構想し構成するという視点が必要とされる。このような複眼的な把握方法の習得のため、市民社会論やガバナンス論を土台に、複数の社会的アクターが活動する地域社会を事例として、アクションリサーチの実践について指導する。さらに、修士論文の執筆のため、アクションリサーチにより得られた資料の解釈の方法、その結果の提示方法を身につけてもらう。

准教授 渡邊 暁子**専門領域** 文化人類学、地域研究（東南アジア）、移動研究**研究内容**

民族や宗教といった人びとを分断する概念装置を相対化し、人びとが対立、衝突しあうだけでなく、融和と共生をはかる在地のメカニズムやネットワークを明らかにすることを重要な研究テーマとする。このため、国家によって周辺化された人びとに焦点を当て、マクロな政治経済状況の変化と対象社会の変容との関わり、人びとの日常的な交渉や関係、マイノリティとしての生存戦略等、かれらの営みとその変容について研究を進めてきた。研究指導においては、制度を視野に入れつつも、対象とする人びとの視点に立った問題意識を持つことを求める。したがって、フィールドワークや文献調査による現地社会の理解を重視している。

学びたいことを最高の場で

私は「学部で学んだことをより深く掘り下げて研究したい」と考え、大学院に進学しました。大学院では学部のような受動的な授業よりも、能動的に調べ、学び、論議することが主体となるので、忙しい反面多くのことを吸収できていると感じます。また、研究内容としては「観光地での景観形成において市民への観光教育が重要とされるのではないか」について研究を行う予定であり、「行政」「民間」「市民」の3つの組織が協同してまちづくりを行うにはどのような取り組みが必要なのかを検討します。文教大学大学院は、少人数だからこそ先生方にもしっかりと指導していただけるので、この2年間で十分に成長できるような頑張りたいです。



国際学研究科 国際学専攻修士課程 2年
中島 悠 さん

■国際学専攻修士課程授業科目の概要

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
国際学総論	林、阿野 奥田、海津 小島、椎野 清水、菅原 孫、黛 宮原、山田 渡邊	21世紀に入ってから国際社会は、ヒト、モノ、情報、資金などの流れが速くなり、大きな構造変化を生じている。また、中国などの新興勢力の勃興は、国際政治の力関係を大きく変えることにつながり、流動化と混迷が深まっている。本授業は、このような国際環境の変化が「国際社会」「市民社会」「国際協力」「国際観光」の分野でどのような構造変化が表れているかを考える。 (オムニバス形式／全15回)
国際関係論特論	林 薫 渡邊 暁子	現在の国際関係を特に貧困と格差の問題から考える。19世紀以降、全世界的には経済が発展するなかで絶対的貧困層と言われる人々が取り残されてきたのか、その原因を分析するとともに、戦後行われていた「援助」というスキームが有効かどうかを考える。オムニバス形式により、各講師が前半と後半でわかれて授業を行う。 (オムニバス形式 全15回)
市民社会・ガバナンス特論	椎野 信雄 山田 修嗣	現代社会を検討する際には、「市民」の概念化とその多様性、ならびに、「市民」の行動の領域・内容・意義が（再）検討されなければならない。授業はこの目的のために、「市民社会」と「ガバナンス」というキーワードを検討の軸に設定する。オムニバス形式の開講とし、担当者が各回、専門的分析視点を提示した後、受講者どうしの話し合いにより検討を進める。とくに、「市民」の一部に含まれるはずの「私」の観点を相互にぶつけ合い、現実的な解を求めることを到達目標とする。 (オムニバス形式 全15回)
多文化交流特論	孫 美幸	日本社会の中で、外国にルーツをもった人々と関わる機会が増えてきている。この授業では、多様な在日外国人の背景を理解し、自らが暮らす日本社会や教育現場の課題を考える。そして、彼らと共に生きていくために自分自身に何ができるかについて具体的に考えていく。学生たちにはこの授業を通して、在日外国人の抱える多様な課題の歴史的背景を説明できるだけではなく、どのように解決していけるか、自らの考えを述べるできるようになってほしい。また、在日外国人についての理解を促す、さまざまな教育実践の理念と内容について説明できるようになることをねらいとする。
国際協力特論	林 薫	開発途上国において実施されるプロジェクトあるいはプログラムの計画・立案、監理、評価の実践的スキルを学ぶ。援助における成果の重視、マクロの経済計画、貧困削減戦略文書（PRSP）、セクターワイドアプローチ、財政支援とプロジェクト支援、参加型・分権的手法の導入などの現在の世界的動向を踏まえて、案件形成、事前評価、モニタリング、事後評価などの定量的、定性的手法を習得する。特に、コンピュータを使用した費用便益の実習を行う。履修者がNGO、コンサルタントあるいは援助機関の職員として実際のプロジェクトに携わるために必要なスキルを身に付けることを達成目標とする。
地域計画特論	海津 ゆりえ 林 薫 山田 修嗣	地域計画が対象とする人々の生活環境は、空間そのものや施設や交通などのいわゆるハード（構造物）と、サービスや産業などの諸活動や交流、教育などのソフトとが動的に作用しあうことによって作り出され、時代とともに変わりゆく。本授業は今日の地域づくりにおける計画設計の思想と技術を習得することを目的とする。オムニバス形式による開講とし、各講師が専門とする分野に基づく複数の分野を題材とした講義を行う。 (オムニバス形式 全15回)
国際ツーリズム特論	清水 麻帆	昨今のグローバル時代において、観光産業は世界の経済成長の原動力の1つであり、世界のGDPと連動するかたちで成長している。日本においても観光振興による地域創生（再生や活性化）が目ざされ、各地で取り組まれているのが実情である。こうした潮流の中、インバウンド観光の動向が地域社会に良くも悪くも影響を及ぼしており、世界各地で観光公害（オーバーツーリズム）と呼ばれる諸問題を引き起こしている。そこで、授業では、これまでのインバウンド観光の様々な形態とそれらの課題および対策を考察し、ポスト・コロナパンデミックにおける維持可能な国際観光のあり方を再考する。
開発と貧困特論	奥田 孝晴	「飢え」と「貧困」からの解放は人類史上、いまだ達成されていない目標の一つです。この講座では、特に第三世界と呼ばれている国々あるいは地域の低開発問題を、おもに開発経済学の学知に基づき説明していきます。扱う内容は、第三世界における人口問題、食糧生産の可能性、「二重経済モデル」を駆使した人口吸引モデル、スラムの問題、工業化戦略など開発経済学の主要分野を網羅して講義していきます。

チャレンジはチャンス

私は中国で日本語を学び、ずっと日本に憧れています。大学時代に文教大学に短期研修をきっかけに、日本に留学することを決めました。国際学部研究生として、半年間に観光についての専門知識を学び、日本の観光地を体験しました。その中で、都市観光とテーマパークに興味があり、両方の関係を大学院の研究内容として決めました。現在は大学院に入り、大学時代に学んだことを全く違う専門ですが、チャレンジとして毎日充実して楽しいと思います。中国にはテーマパークの建設ブームを迎えるので、この二年間の勉強や研究を通し、自分の能力を伸ばし、中国のテーマパーク産業の力になりたいと思います。



国際学研究科 国際学専攻修士課程 2年
曹 松寒 さん

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
開発人類学特論	渡邊 暁子	開発人類学は、文化の視点から途上国の開発問題に「実践的」に関与する人類学の一領域である。本授業では、1960年代以降に開発主義政策をすすめてきた「途上国」を対象に、「開発される側」に置かれてきた周縁世界の人びとに焦点を当てることによって、先進国の人々が陥りがちな開発観のバイアスや、さまざまな開発のかたち、人びとの多様な生き方および考え方について理解していく。
平和とグローバルガバナンス特論	木村 昌孝	人間の活動範囲の拡大とグローバル化の進展により、国家単位では対処しきれない地球規模の問題が増大している。主権国家から成り立ち中央政府がない国際社会は、これらの問題にどのように対処すれば良いのであろうか。グローバルガバナンスの課題は、世界政府なしで、どのように秩序を作るか（戦争と平和の問題）のみでなく、20世紀を境に、どのように世界的課題に対処するため協力できるかが重要になっている。本授業では、国際関係の特定分野において形成されつつある様々なレジーム（原理原則、規範、ルール、及び決定手続きのセット）を取り上げ、国家間の協力を実現することの可能性と課題について考察する。
情報デザイン特論	黛 陽子	情報デザインとは、情報活用能力をもとに、情報を利用する人の活動の中に問題を発見し、それらを解決するための方法や手順を設計し、解決案を提示する一連の活動を含むものとされる。本講義では、従来の情報デザイン論の基礎的考え方を学ぶことに始まり、ロバート・ヤコブソンの「情報デザイン原論」の抄読へ進め、情報デザインの多面的な研究事例を学ぶ。事例では、人間のセンスメイキング（認識・理解）の特性に配慮した人間中心のデザイン方法等について主に触れる。これは、修士論文では図表の表現の仕方の学習に活かされ、就職対策としては情報提供業務における基本的な知識に役立つことを意図している。
国際経済・国際金融特論	菅原 周一	世界同時金融危機から、人々は多くの教訓を得て、金融危機、経済危機の再発防止策や再発時の対処方法が検討され、実践されている。一方で、富の格差から生じる現在の資本主義に関する問題点が指摘されるなど、解決されるべき課題も数多く残されている。本授業では、これらの現状を踏まえ、金融危機を多面的に捉えるとともに、富や教育の格差が新たな格差を生む現状をファイナンスの立場から整理、検討する。
国際協力NGO特論	林 薫	持続可能な開発目標に国際社会が取り組んでいます。一方で一国主義が蔓延しつつあり、国際協力が退潮しているようにも見えます。新型コロナウイルスはこのような傾向を加速しつつあるようです。この中で、NGO、特に国際NGOが担うべき役割はなんのでしょうか？ 本授業では、「NGO活動」としての検証範囲を、NPO、CSO、ソーシャルビジネス、あるいはボランティア活動全般などを含め広く捉え、グローバル化した世界における課題、その中でNGOの果たす役割と存在意義、今後の方向性や展望を考察します。「自発的協力がベースとなる社会」をポスト資本主義の方向性として考えていきます。
地域研究特論	宮原 辰夫	グローバル化に伴い、アジアの経済成長は著しい。とくに東南アジアにおいて、国境を越えた新しい経済圏が形成されつつある。その一方で、地域主義も高まり、宗教・文化を中心に自国アイデンティティの模索も強まっている。こうした動きは日本国内の産業や企業にも大きな影響を与えつつある。本授業では、アジア地域（とくに東南アジア、南アジア）の観光産業に焦点をあて、グローバル化に伴う経済発展と地域主義の高まりに伴う自国アイデンティティの広がりという二つの軸を通して、アジア地域の観光産業のありようを分析する。
ジェンダーと教育特論	椎野 信雄	脱近代社会としての欧米諸国のジェンダー平等状況を理解することを通して、「ジェンダーと教育」の問題を、国際社会における人権とセクシュアリティの現状を認識することで、検討できるようにする。キーワードである「ジェンダー」「教育」「人権」「セクシュアリティ」の概念理解を深めて、問題把握できるようになっていく。補助線として、グローバル化とシティズンシップ教育を引いてみる。到達目標は、国際社会におけるシティズンシップ教育の視点で、セクシュアル・マイノリティ問題を考察できるようになることである。
地域文化マネジメント特論	井上 由佳	「文化」とは有史以降、人間が常に向き合い、そして発展させてきた営みである。人によっては、文化をアートと表現する場合もあるだろう。本科目では、アートをも含む広い概念として「文化」を定義し、文化を守り発展させるための政策・事業のあり方、そしてそれを継続的に運営するための仕組みや仕組み、すなわちマネジメントについて学んでいく。文化政策ならびに文化事業の中でも、地方自治体为主体となる範囲の「地域文化」にフォーカスしつつ、人々と文化をつなぐための施策について国内外の事例を検討しながら国際的な視点から考えていきたい。

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
環境政策特論	山田 修嗣	環境政策はどのような社会的意味を持つかについて、受講者と考える。環境政策の現場に足を踏み入れ、実習を通じて理解することを含む。扱う内容は、1970年代以降の日本と欧米の環境政策である。まず、政策とは何か、環境とは何か（環境はどのように定義されてきたか）を把握する。加えて、ローカル・リージョナル・グローバルな領域での政策の展開をとらえ、改善対象としての環境（環境がどのように扱われてきたか）を確認する。また、演習という性格上、受講者の実践も不可欠である。そのため、主として自治体レベルでの実習を組み入れる。実習により、政策を企画・実施する現場の視点を得て、いっそうの理解を深める。
サステナブルツーリズム特論	海津 ゆりえ	持続可能な発展＝サステナブル・ディベロップメントは21世紀に至る世界が獲得した新たな成長と発展のモデルである。本授業は、サステナビリティの概念と政策や各種産業における取組、および限界について議論し、持続可能な開発の今後の在り方について考える。またツーリズム産業は、個人の旅行を支えるのみならず、広範な産業連関の上に成り立つ裾野の広い産業である一方で、環境や地域社会等に直接的な影響を及ぼすことから「サステナブル・ツーリズム」の概念は避けて通ることができない。講義の後半ではツーリズム産業に焦点を当てる。
国際交通特論	小島 克巳	交通事業では伝統的に料金や参入の面で公的規制が課されてきたが、市場環境の変化に伴い1980年代から欧米を皮切りに規制緩和が進められてきた。そのため、航空などの国際交通における人流や物流を理解するためには、各国の交通政策やこれらの背景を理解することは欠かせない。そこでこの授業では、航空をはじめとする各国の国際交通政策を概観するとともに、交通自由化時代における国際交通のあり方、国際空港などの交通インフラの整備・運営方法といったテーマについて考えていく。
観光行動特論	清水 麻帆	なぜ人は旅をするのだろうか。どのような人たちがどのような場所を訪れているのか、なぜ何度も同じ場所を訪れるのか。これらを学術的に説明するのが観光行動論である。これらの問いに対する答えは旅行者のニーズであり、こうした観光動機に影響する要因や背景などを理解しておくことは、魅力のある商品開発やマーケティング及び観光振興による地域経営などを考える際に役に立つ。そこで、授業の前半では講義形式で観光行動論に関する基礎的知識を学修し、後半では、コンテンツツーリズム（聖地巡礼）などをはじめとした様々な観光形態の観光行動を考察し、それについて議論する。
サービスマネジメント特論	福島 規子	サービスに関する学術的考察と接客現場での事例をもとに対人サービスにおけるホスピタリティについて学ぶ。履修者はレストランやショップ等に出向き対人接客サービスが生成されている現場でサービス調査を実施し、調査結果をパワーポイントを用いて授業内で発表し、それをもとに討論を行う。
ツーリズム心理学特論	福島 規子	旅行業界には店舗を構えるリアルエージェントと、店舗を持たずにweb上だけで旅行商品を販売するオンラインエージェントがある。同じ目的地に行くにしても、人は自身の価値観や習慣、ライフスタイルによって購入方法を変える。このように旅行者心理は環境や状況などによって大きく異なる。この授業では、人が旅を企画し旅に行くまでの「旅まえ」と、旅行中の「旅なか」、そして、旅行後の「旅あと」の心理変化について探索していく。なお、受講生は集中講義開始前に、「旅まえ」「旅なか」「旅あと」のそれぞれについて、旅行者はどのような心理状態にあるのかを先行研究をもとに仮説をたてレジメを作成し、授業内で発表する。その後、受講生全員で討論を行う。
グローバル化と言語教育演習	阿野 幸一	本授業では、グローバル化に対応する英語教育を機能させるための英語の授業のあり方について考察する。国際社会に対応できる英語によるコミュニケーション能力を身につけるためには、どのような指導計画のもとに授業を設計することで児童・生徒の動機づけを行うことができるか、そしてどのような教授法や教材が英語力を高めるための指導に寄与するかについて検証していく。文献研究にとどまらず、優れた実践を行っている教室を訪問し、授業分析も行うことで、国際社会で求められる言語教育について理解を深めていきたい。
フィールド調査法演習	渡邊 暁子	本授業では、フィールド（現場）に出て社会や文化、自然現象などに触れ、観察や聞き取り調査などを行うことによって、地域の仕組みや成り立ちを学ぶ。フィールド調査を通じて、講義等で学んだ内容を体験的に理解することを目的とする。本授業では、フィールド調査の企画、フィールド調査の実施、フィールド調査のまとめの3つの段階に分かれている。フィールド調査を中心とした調査研究を、実際に一通り完結させることによって、地域調査に必要とされるスキルと心構えを習得することを目指す。
日本語アカデミック・ライティング演習	野村 美穂子	大学院に進学するほどの留学生であれば当然自分の関心分野に対しては高い問題意識を持っているはずだが、どれほど優れた研究をしていても、修士論文が「読んでも文意がよくわからない」ようなものでは修士課程を無事修了することができない。母語話者でない者が独力で自然な文章表現の論文を書くことが困難なのは当たりまえのことである。この授業では、受講者各自の実際の論文執筆状況に応じて、日本語の表現を徹底的にチェックする。個別指導が基本となる。

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
社会調査演習	山田 修嗣	本授業では調査の意義・目的について概説した後、質的・量的なデータを用いる研究方法について、参加者が集めた資料にもとづき演習を行う。参与観察や半構造化インタビューといった質的研究の代表例も扱うが、表計算ソフト等を使った量的データ分析の実習に多くの時間を割くことを予定する。分析スキルの初歩を身につけるねらいから、分布、分散、標準化、検定、相関係数、クロス表、各種グラフなどの作り方や読み方をおさえ、回帰分析ができる程度のレベルを目指す。必要に応じ、PC教室での実習とする。
英語プレゼンテーション演習	阿野 幸一	大学院生各自の研究内容について、英語で口頭発表をすることができることをねらいとする。 国際学会での共通語は、ほとんどの場合が英語である。それぞれの大学院生の研究成果を社会に発信するためには、効果的に伝える英語によるプレゼンテーション力が欠かすことのできない要素である。本演習では、英語によるプレゼンテーションの組み立て方、発表資料の作成方法などを学ぶとともに、その土台となる英語力の育成も同時に行う。そして、各自の研究内容を英語で伝えるために必要な語彙や表現を学びながら、実際に英語によるプレゼンテーションを行う。

開設！『東京あだちキャンパス』



2021年4月、東京に新キャンパスが生まれます。

学校法人文教大学学園は、東京あだちキャンパスの開設を決定。従来の越谷・湘南キャンパスに加え、都内に新キャンパスを開設し、首都圏1都2県にまたがるトリプルキャンパス体制で新たな教育環境をスタートさせます。

2021年4月『国際学部』、『経営学部』の移転に伴い、『国際学研究科』も東京あだちキャンパスへ一斉移転します。

